



Leica Camera Japan Co., Ltd. / 1-7-1 Yuraku-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 100-0006, Japan /
Telephone 03-5221-9501 / Facsimile 03-5221-9502 / www.leica-camera.co.jp

Press Release

ライカギャラリー京都

安珠写真展 開催

「Invisible Kyoto －目に見えぬ平安京－」

ライカカメラジャパン株式会社（本社：東京都千代田区）は、国内外で活躍する写真家である安珠の写真展「Invisible Kyoto －目に見えぬ平安京－」をライカギャラリー京都にて3月11日から6月8日まで開催いたします。

四季折々の絶景と伝統文化が息づく世界屈指の観光地である京都。

その源である平安京に焦点を当てた「Invisible Kyoto」。

風水でいう四神相応に守られた平安京は、あらゆる意味で生と死が混在し、人々は見えぬ世界を信じていた。

今となっては当時の古都を見ることは出来ない。

伝承されている諸説の物語などから平安京を紐解き、形而上写真で表現。

平安時代の独特的死生観や無常という概念に注目し、桜や紅葉の散る姿に我が命の儚さを重ね、歌に詠んだ歌人のように写真に撮り下ろしす安珠の「Invisible Kyoto －目に見えぬ平安京－」をご覧くださいませ。

「Invisible Kyoto」のプロジェクトは、この度のライカギャラリー京都での写真展を発端に、長期に渡る活動となります。また、作品は、プロフェッショナル仕様のミラーレスカメラ、ライカSLで撮影されています。ぜひ、この機会に、ライカSLで撮り下ろしています。



作品: 「菊の匂いに誘われて」 ©Anju

菊の匂いに誘われて故郷の信太の森を思い出し、白狐に戻ってしまった安倍晴明の母、葛の葉。葛の葉伝説の姿見の井戸、千枝の楠、白狐、朝夕の変転を集約。

「写真展 概要」

作家 安珠(Anju)

タイトル Invisible Kyoto －目に見えぬ平安京－

期間 2017年3月11日（土）- 6月8日（木）

会場 ライカギャラリー京都（ライカ京都店2F）

京都市東山区祇園町南側570-120 Tel. 075-532-0320

会場音楽: 細野晴臣 会場文:松本隆「安珠のレンズ」

HP詳細 <http://bit.ly/2mZvgIS>

「特別ゲストをお迎えしてトークショーも開催」

●3月11日 松本隆さん、●4月1日11:00～11:45とよた真帆さん、

●4月28日14:00～14:45細野晴臣さん、●5月20日16:00～16:45小山薰堂さん他。

(随時、開催2週間前に募集開始。先着順で定員になり次第締め切ります)

場 所： ライカギャラリー京都（ライカ京都店2F）

定 員： 約60名様 参加費： 無料

参加ご希望のお客様は、お電話（075-532-0320）または

Email（leica-kyoto@leica-camera.co.jp）にてお申し込みください。



安珠（あんじゅ） プロフィール
東京出身。十代の頃、モデルとしてジバンシーにスカウトされ専属契約し渡仏。フォトグラファーのピーター・リンドバーグやオリビエ・トスカーニ等と各国の「ヴォーグ」や「エル」等のモード誌を飾り、パリ・コレクションなどで国際的に活躍。帰国後、文章を織り交ぜた物語のある独自の世界で写真家に転身。1990年代から、作品集として、『サーカスの少年』、『少女の行方』、『星をめぐる少年』、『眠らない夢』、『恋文の森』、『小さな太陽』などを出版し、写真展を多く開催。広告、雑誌連載、文筆や講演、多ジャンルの審査員、ビジュアルプランから映像監督まで幅広く活躍。ライフワークとして、2014年に『Dream Linking☆つ～～なぐ夢、千年忘れない』（朝日新聞出版）を刊行し、写真の力を通して、東北を中心とした「子どもたちの夢」を伝える写真展や講演（パリ・ボンマルシェ、東京ミッドタウン、全国20ヶ所以上）を続行。京都の作品『Invisible Kyoto』と並行して、中国の世界自然遺産である張家界の作品『仙人の千年、蜻蛉の一時』も長期に渡り撮影中。同展は全国五ヶ所で開催し、中国でも評価が高い。また、戦後70年を境に「写真を読み解く力」についても活動。

本件に関するお問い合わせ先

ライカカメラジャパン株式会社 企画部 米山和久、田中紘子

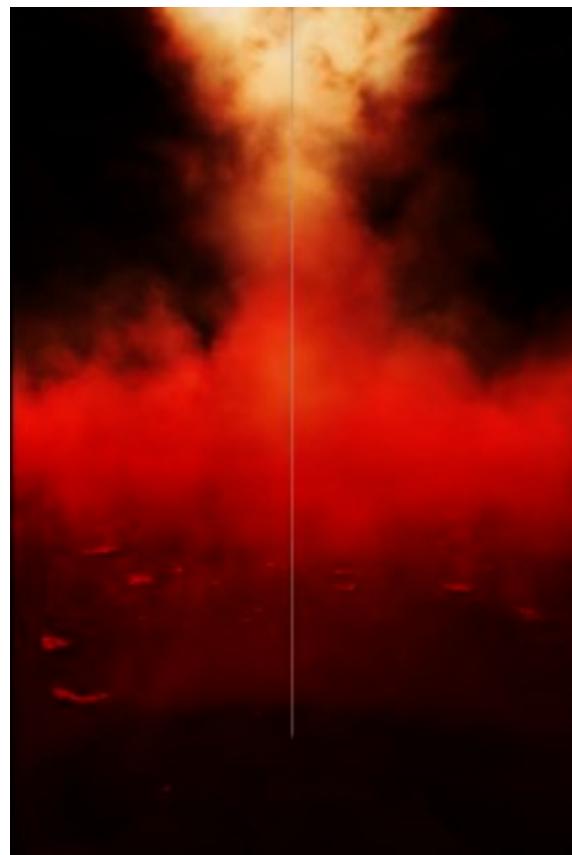
Tel: 03-5221-9501 Fax: 03-5221-9502 Email: h-tanaka@leica-camera.co.jp

作品



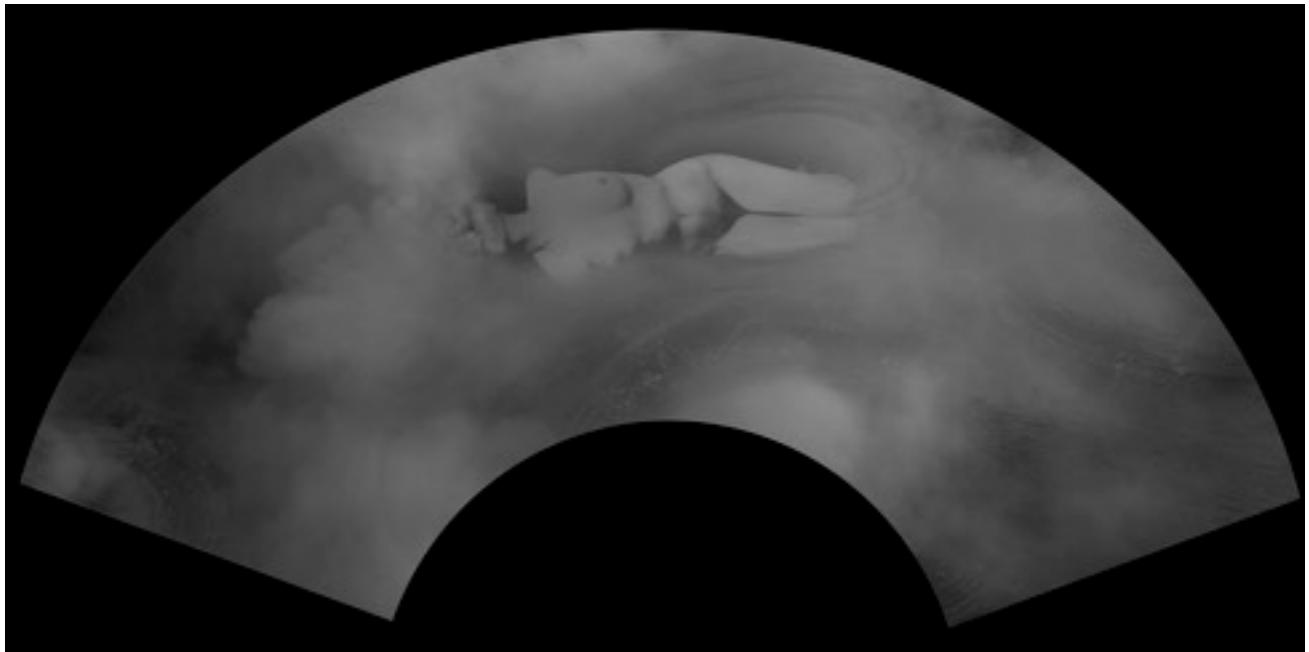
「青馬」 ©Anju

平安時代、正月七日に青馬を眺めれば年中の邪気から逃れられるとされた。馬は[陽]の獣、青は[春]の象徴の色であったことから[青馬]と言わされた。「枕草子」に雪積もる日、女房らが新調した車で青馬節会に集ったとある。現在も正月七日に京都では、上賀茂神社で白馬奏覽神事が行われている。



「極楽からの『蜘蛛の糸』、遙か下の地獄の底へ」 ©Anju

仏教における[地獄]は、最下層に位置する垂直的な宇宙的他界觀。平安初期の説話文学最初期の文献「日本靈異記」の[地獄]は西北の水平的位置に構想され理解に乏しい。[地獄]の概念は平安時代に浸透してゆく。



「水になった絶世の美女」 ©Anju

平安京の鬼は音楽も嗜み、双六もする。朱雀門の樓上で、鬼は[絶世の美女]を賭けて長谷雄に双六の勝負で敗れる。長谷雄はあまりの美しさに「百日間この女に触れてはならぬ」という鬼の言葉を守れず、80日でその女(美しい死人の寄せ集め)を抱くと、女は水と化して流れ去った。(長谷雄草紙より)



「ちはやぶる」 ©Anju

平安時代、紅葉狩りでは枯れて散る葉にわが身を重ねた歌も多い。
豊かな四季に死生観を垣間みる。